

淨土

1991-11

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授受承認雑誌） 第三二五号
平成三年十月二十五日印刷 平成三年十一月一日発行
第五十七卷 十一月号



191

“高”

“杯”





十一月の秀句

峠見ゆ十一月のむなしさに

立冬の病みて眩しきものばかり

針売も善光寺路の小春かな

細見綾子

荒谷利夫

飯田蛇笏



釈迦一代の聖教に讃むるところ、
皆弥陀にあり、いかにいわんや、
未来悪世の凡夫をや。

——「念仏大意」

目 次

＝連載＝

生も死も悦べる世界(二)……………須 藤 隆 仙……(2)

読者のページ

心経と私……………萩 原 かね子……(20)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔7〕お十夜 ……………(19)

〈寄 稿〉

全生類愛……………合 田 微 雪……(22)

季語やぶにらみ (17)

……………木 下 隆 一 ……(26)

涼風都門に入る

◇◇心のしらべ・生活のうた③◇◇

芭蕉……………細 田 隆 善……(9)

表紙絵 小林治郎画

生も死も悦べる世界(二)

本願ということ

次に、「逢い難き本願に逢いて」という法然上人のお言葉の意味を考えてみます。

まず「本願」とは一体何でありましょうか。『広辞苑』には「本願」を、「①本来の念願。②仏・菩薩が過去世において発起した衆生済度の誓願。阿弥陀仏の四十八願など」と説明してあります。②は仏教での「本願」の意義の説明ですが、つまり本願とは、仏教が私たちを救おうとする意志をいつているわけであります。これについて、仏教の教義の上から

須藤隆仙

(函館市称名寺住職)



の説明を少ししておく必要があると思うのです。ちよつとはじめの方は面白くないかも知れませんが、我慢して聞いて頂きます。

無量寿経には、阿弥陀仏の本願ということが、くわしく説かれております。

本願というのは、仏や菩薩が衆生を救わんとしておこした願のことです。衆生を救おうとする誓いでありますから、これを誓願とか本誓ほんせいの願とかいっております。また宿願といつてもよいでしょう。さてここで「願」ということを説明しておく必要があります。

だいたい仏というものは、自分で行をみがいて仏の悟りを開くとともに、さらに人をも悟らしめていくという、他を教化する「はたらき」をも全うされるわけです。これを自覚覚他といっております。

自覚は「自からのさとり」であり、覚他は「他の人をさとらしめる」ことであります。他の人をさとらしめるには、そのようにしようという慈悲の心が根源となります。その心がすなわち「願」であります。

仏さまは、みなこの慈悲の願をもっております。ところでこの慈悲の願は、全部の仏に共通の願と、さらにその上に、自分はこのようにして衆生を救おう、という具体的な願とに分かれます。共通の願を「総願」といい、具体的な願を「別願」といっております。

総願はふつう、四弘誓願しごうせいがんといつて、四つ数えられております。①衆生は無辺なれど、誓つ

て度わんことを願う、②煩惱は無量なれど、誓って断ぜんことを願う、③法門は無尽なれど、誓って学ばんことを願う、④仏道は無上なれど、誓って成ぜんことを願う、という四つであります。この四つは、どの仏さまもみなもっている共通の願であります。

右の①の願には、衆生を救わんということがうたわれておりますが、さてこれだけでは、具体的にどうやって救うか、ということが示されておりません。

そこでこれを具体的に示したものを別願といいますが、いまここにいう「本願」とは、この別願のことです。

たとえば薬師如来には十二の別願があり、阿弥陀仏には四十八の別願があります。これを薬師の本願、弥陀の本願といっております。

無量寿経には弥陀の本願・四十八が詳細に示されております。

それによると、久遠無量不可思議無央数劫むあうむこうといふ数えることのできない遠い昔に、錠じやう光如来という仏さまが世に出られ、それからつぎつぎと、いろいろの仏さまが世に出られて五十三人もの仏さまが出られ、五十四番目に世自在王如来せじざいおうという仏さまが出られた。そのとき国王が出家して法蔵ほうぞうと名のり世自在王仏の弟子となつて、衆生救済のために四十八の願をおこした、とこういうのであります。

その四十八願というのは、自分（法蔵）が仏となつて浄土を築いたら、そこに生まれて

くる人は、地獄・餓鬼・畜生の姿をはなれ、かたちも美しく、なに一つ不自由のないものとなる、などということ、四十八通りに述べてあるもので、人間の不完全な部分を救おう、その救われた世界こそ、わが浄土であるとするものであります。

その中に、自分（法蔵）は阿弥陀という仏になるので、その仏名を称えた人は、みなこの完全無欠の浄土に救ってやろう、という願もあるのです。これが十八番目の願なので、十八願といい、四十八の中で一ばん大切な願とされて、王本願といわれております。

そして法蔵は実際にこれらの願を成就して、阿弥陀仏になられたわけで、それであるから、この阿弥陀仏の願（または法蔵菩薩の願ともいう）を信じて、念仏を称えよ、とこの経は結んでいるのであります。

こういうと、まるで「おとぎ話」のように聞こえるのですが、じつは宗教の真実が、四十八願という本願のかたちで示されているのであって、これが出てきた奥には深い意義が蔵されているのです。

阿弥陀仏の本願を説いている無量寿経は、阿弥陀経と並んで、たいへんむずかしいお経、ということ、です。

むずかしいというよりは、完全な信心で領解（りやうげ）しませんと、なかなか理解困難なお経なのであります（「領解」とは、悟ること、会得（えとく）することである）。

そのことは、釈尊自身が、お経の末尾に「この難信の法を説く、これを甚難とす」とい
い（阿弥陀經）、「この經を聞きて信樂し受持せんこと、難が中の難なり。この難に過ぎた
るはなし」（無量壽經）とおおせられているのであります。甚難とは、説くのもまた大変だっ
たということです。

つまりこれらのお経は、たいへん信じ難い法であるということです。

信じ難いということは、「なまはんか」な信心では会得できないということで、完全な
信心でなければだめだ、ということでもあります。

それだけに、極樂淨土とか、四十八願ということは、めんどろでもあり、また意味の深
いものなのでもあります。

前項で、法藏菩薩が四十八の願を全うされて、阿弥陀仏になられた、ということを書べ
ましたが、現代の人たちにもわかるようにこれを説明したら、どういうことになるであ
りましょう。

まず法藏菩薩についてであります。このお方は國王だったということになっております
が、なにせその出現が、十劫の昔という、とてつもなく遠い話であります。劫というのは、
四十里立方の石を、三年に一度天女が降りてきて、その羽衣で石を一度なでていき、その
ために石が摩滅するのを一劫という、ということですから、とても話になるものではありません。

せん。石より先に羽衣のほうが、すり切れてしまうことでしょう。要するにこれは、無限の昔、ということです。

そんな遠い昔に、はたしてどんな国があったか、法蔵という人がおったかどうか、そんなことは解ったものではありません。現代の知識でいうならば、それこそ十劫の昔の人間は、アメーバであつたかも知れません。

ところが、その昔に国王出家して法蔵菩薩となり、その法蔵菩薩が、四十八の本願を成就して、阿弥陀仏になったと説いている、これは一体どういうことでありましょう。

ここに説かれている国王とは、釈尊自身にほかなりません。法蔵菩薩も釈尊であり、阿弥陀仏もまた釈尊であります。

つまり、釈尊の悟りというのは、二千数百年の昔に、インドで開かれたことになっているけれども、実際はそうではない。その悟りの内容は、インドの釈尊以前の、もつともつと久遠の昔からあつたもので、悟りというものが、未完の人間を救う力として存在したのも、不可思議久遠の昔からである、ということの説明しているのが、法蔵の話であり、四十八願の話なのであります。

したがって、釈尊というものは、逆に阿弥陀仏がインドに現われたものであり、釈尊の本体は阿弥陀仏である、と説明しているのが、この無量寿経の本願の教説なのです。

◎「維持会員」へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

心のしらべ・生活のうた(三)

芭蕉

芭蕉は海外にまで

芭蕉の俳文学研究の外人として第一人者はアメリカ・コロンビア大学教授のドナルド・キーン先生である。キーン先生は芭蕉の「奥の細道」を六十回も味わったと答えられた。先生が芭蕉の俳句の中

細田隆善(俳号豊明)

でもっとも好きなのは次の一句であるといわれた。

夏草や兵どもが夢の跡

芭蕉

平泉も高館たかだても栄えた地であるが、義経の戦死、藤原三代の栄華ともに亡び去って、芭蕉は夏草に腰を降ろして涙を流したところにこの句が結晶された。わ

ずか十七の文字でこのように内容の深い詩が作られたことと文章に深い絶賛を生はよせられた。

またアメリカ・メリーランド大学助教授エリーナ・カーカム女史は「奥の細道」の博士論文を出された。ケルン大学教授のゲーザ・ドンブラディ氏は「奥の細道」のドイツ語翻訳を出版された。世界の国々において芭蕉はいろいろと研究されている。とくに昨年は芭蕉が奥の細道の旅に出てから三百年であるので、記念事業として行事が各地で行われた。

かつてレーガン大統領が来日され、日米友好親善のために国会において一時間講演されたことがある。自由を説明するために、つぎの芭蕉の句を引用されたの

である。

草いろいろおのおの花の手柄かな

芭蕉

この句は芭蕉が貞享五年（一六八八）八月、「更科紀行」旅立ちのとき、美濃（岐阜県）において弟子との別れに際し、おのおの個性のある俳諧精進をつづけていることを称えた句である。草いろいろが秋の季題で、秋草とも千草ともいう。色とりどりの秋草が花を咲かせているように、自由なめいめいがそれぞれの良さを發揮して持ち味を生かしていることにすばらしさがあると大統領は説明されたのである。

俳句は世界でもっとも短かい詩であり、自然詠であるので世界の人々が目を

芭蕉の生い立ち

芭蕉は幼名を金作、長じて甚七郎、忠
右衛門、宗房（排号は宗房）と称した。

父の松尾与左衛門は平家の末流、地侍（中世、地方の土着の武士）の無足人（無給の武士）であつたという。母は伊賀名張（三重県）の桃地氏、兄は半左衛門で芭蕉の来訪をいつもよろこび迎えた。姉一人（早世）妹は二人であつた。

上野の侍大将さむらい（一軍の將をいう）藤堂良精よしただの嫡子よしただの良忠よしただの小々姓ここしやう（元服前の若

寛文六年（一六六六）芭蕉二十三歳とき蟬吟が病没したので、芭蕉は生家を去り、京都に出て季吟に学び、漢学を伊藤担庵（宝永五年（一七〇八）没）に学び、

文学の研鑽につとめたのである。

芭蕉江戸へ

芭蕉二十九歳のとき寛文十二年（一六七二）春、江戸へ出たことが芭蕉の大転機となった。このとき郷里の俳人との句集「貝おほひ」を新興大都市となった江戸へ持参し、俳諧への情熱を燃やしたのである。このころから俳諧の貞門風を離れ、談林風へと転向していった。

延宝三年（一六七五）芭蕉三十二歳のとき、談林派の祖である西山宗因（天和二年（一六八二）没）が江戸へ来たので手厚く迎えた。これから俳号を宗房から桃青に改めた。芭蕉の名高はしだいに高まり、宝井其角（宝永四年（一七〇七）

没）、服部嵐雪（宝永四年（一七〇七）没）たち入門者が増加し、山口素堂（享保元年（一七一六）没）ら芭蕉のよき協力者も増えた。

芭蕉三十四歳のときから四年、小石川（文京区）の水道工事の書記のような水役をつとめた。現在関口芭蕉庵としてその史跡が保存されている。門人が、多くなり俳諧宗匠として江戸におけるその勢力は確立されて、生活は安定したのである。

このころ甥の桃印を故郷から連れてきたが、住いは杉山杉風（享保十七年（一七三二）没）や小沢卜尺（宝永六年（一七〇九）没）たちの世話になっていた。

芭蕉・深川芭蕉庵へ

延宝八年（一六八〇）芭蕉三十七歳のときも芭蕉生涯における一大転機であった。芭蕉はかねてから俳諧の「侘び」と「寂び」の蕉風の樹立を目差していた。この年の秋、枯淡の作風のつぎ句を芭蕉は吟じた。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮　芭蕉

この年の冬、魚問屋の杉風の生簀のあった深川村の六軒堀に移り、番小屋を改造した狭い一部屋に住んだ。俳諧宗匠としての安定した生活を捨て、家庭や妻子を持つことを捨てて出家のような生活に入った。名利を捨て風雅の道に進み、ひたすら蕉風の確立につとめ、衣食住は

人間の生きるための最低の生活であった。

翌年門人の李下りかがこの草庵に芭蕉を植えたが、これがよく育ち、四季の移り変わる姿が美しいので芭蕉はこれを愛好し、俳号も芭蕉と称し、草庵も深川芭蕉庵と称するようになった。署名を「はせを」とよく記すようになったのは、この芭蕉に由来するからである。

槽うの声にはらわた氷こおるよやなみだ

芭蕉

この句から天和元年（一六八一）深川芭蕉庵の生活が、貧窮と孤独と寂寥の悲嘆に満ちたことであることをうかがい知ることができる。

芭蕉旅を愛す

天和二年（一六八二）の暮れの十二月二十八日、芭蕉三十九歳のとき、八百屋お七の火事が、隅田川をわたって延焼し、小さい深川芭蕉庵は類焼した。芭蕉は水につかってようやく一命を助けた。甲斐の国（山梨県都留市）に滞在したが、このころから天和新風の俳諧を現すようになった。この火災により芭蕉は人生火宅の無常感をさとり、人生は旅であるとし、以来漂泊の旅の生活が多くなった。

貞享元年（一六八四）芭蕉四十一歳のとき「野ざらし紀行」（甲子吟行ともいう）の旅に出た。

貞享三年（一六八六）芭蕉の代表句と

いわれるつぎの古池の句を吟じた。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

貞享四年（一六八七）八月、「鹿島紀行」（鹿島詣ともいう）の旅に出て、十月には「笈の小文」の旅に出た。

貞享五年（一六八八）春は吉野の花の旅に出て、八月には「更科紀行」の旅に出た。深川芭蕉庵にいるときは来訪者が多くなり、俳事多忙をきわめるようになった。

芭蕉はますます蕉風の確立を目差し「侘び」と「寂び」の心を俳諧に強調した。この思想は中世の美意識を俳諧の中に生かしたものである。芭蕉は、「笈の小文」の中に四つの事例をにかけてこれを説明している。（一）西行の和歌におけ

る(二)宗祇そうぎの連歌れんがにおける(三)雪舟せつしゆの絵における(四)利休りきゅうが茶における、その貫通するものは一つなりと説明している。

西行さいぎやう(建久元年(一一九〇)没)は平安後期の歌人、武士であつたが出家し各地を漂泊、孤独な人生と自然を歌にし、抒情的な歌風を確立し、芭蕉はその美意識に陶醉したのである。宗祇そうぎ(文龜二年(一一五〇)没)は室町時代の連歌師、仏道修行し和歌連歌に没頭、各地を漂泊、旅の歌人と評され、芭蕉は宗祇の自然愛に心酔したのである。雪舟せつしゆ(永正三年(一五〇六)没)は室町後期の画家、中国に学び、枯淡な水墨画によって大自然を自由の境地中に捉えた。利休りきゅう(天正十九年(一五九一)没)は安土桃山時代の茶人、

簡素、静寂、清淨を旨とする佗わ数奇すきの茶道を大成し、茶器小道具に至るまで創意工夫をこらした。この四人の佗わびと寂びの精神を俳諧の美意識の中に生かすことが蕉風の確立であつた。

奥の細道

元禄二年(一六八九)芭蕉四十六歳のとき永年の夢であつた奥の細道の旅に出た。三月上旬深川芭蕉庵を人に譲り、杉風の別墅べつしよ(しも屋敷)の採茶庵さいたに留まり、門弟たちと別れを惜しんだ。(現在江東区平野一丁目)

月日は百代はくたいの過客かかくにして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかふる者は、

日々旅にして旅を栖すみかとす……

「奥の細道」冒頭の名文のはじめである。全文に芭蕉の句は五十句登載されているが最初の一句はつぎの句である。

草の戸も住替すみかわる代ぞひなの家　芭蕉

二十日、採茶庵の近く海辺橋から舟に

乗り、仙台堀川を下って隅田川に出て、

千住（足立区）に上り、二十七日春日部かすかべ

（埼玉県）に泊り、曾良そら（宝永七年（一

七一〇）没）を伴い、九月五日大垣に至

るまでの半年間の長途の旅を歩いたので

ある。この紀行文は元禄六年（一六九三）

まで添削を重ね、素龍そりゅう（生没年不詳・

一説に元禄十二年（一六九九年）没）に

清記させて、翌年最後の大坂の旅にこれ

を持参したのである。わが国紀行文の中

で最高であり、この紀行文の中に芭蕉の佳句が光彩を放っているのである。その中から十句を選ぶ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪なみだ

五月雨さみだれの降りのこしてや光堂ひかりどう

閑しづかさや岩にしみ入蟬いりせみの声

五月雨を集めて早し最上川

象潟さかたや雨に西施せいしがねぶの花

荒海や佐渡によこたふ天河あまのがわ

一家ひとつやに遊女も寝たり萩と月

塚も動けわが泣く声は秋の風

むざんやな甲かぶとの下のきりぎりす

蛤はまぐりのふたみにわかれ行く秋ぞ

私は十年かけて芭蕉の奥の細道を尋ね歩き芭蕉の句碑と史跡を調査、往時の芭蕉の思いを偲び、奥の細道三百年祭に概

ね完了することができたが、大変なコースであった。

芭蕉の最後

元禄三年（一六九〇）、膳所^{ぜぜ}（大津市）の幻住庵^{げんじゅ}において、名文と称せられる「幻住庵記」を書き、翌年は落柿舎^{らくし}（京都）で「嵯峨日記」を書いた。さらに翌年「芭蕉を移す詞」^{ことば}「芭蕉庵三日月日記」を著した。

元禄六年（一六九三）三月、深川芭蕉庵において甥の桃印が死去し、七月「閉関の説」^{せつ}を書き、門を閉ざして人に会わなくなった。そのころ寿貞^{じゅてい}とその子が芭蕉を頼って深川芭蕉庵へきた。寿貞は芭蕉若い頃の知人であったという。

元禄七年（一六九四）五月、芭蕉五十歳のとき寿貞の子、次郎兵衛をつれて最後の旅関西へでかけた。九月、大阪の園女^{そのじょ}（享保十一年（一七二六）没）の宅に寄り、身体の不調をきたし十月五日、大阪御堂前花屋仁左衛門方に移された。十月八日、つぎの最後の句を支考^{しこう}（享保十六年（一七三一）没）に渡した。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 芭蕉
十月十日遺書を残し、十二日午後四時永眠し五十一歳の生涯であった。遺言により遺体は義仲寺^{ぎちゆう}（大津市）へ運び、埋葬したのである。会葬者は江戸からかけつけた其角をはじめ、三百余人、其角の「芭蕉翁終焉記」、支考の「笈日記」に詳述されている。

＜日本図書館協会選定図書＞

『江戸物語』

細田隆善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

- 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録
- 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

（発行・発売） ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話（〇三）三三六九―一二九三 三三六七―六六三七
振替（東京）七―一一〇九三／千一六二

芭蕉は数々の紀行文、句集、書簡文等を残し、わが国の文化史上巨大な足跡を残した。俳風は天和風・貞享風、元禄風と発展し、かろみ風となり、不易流行論を述べたが、一貫して風雅の道、蕉風の

確立に力を尽した。江戸時代は、文人、武士、商人、歌舞伎役者たちも多くは俳号を持ち、俳諧をたのしんだ。俳諧は、芭蕉によって生れた江戸時代の華であった。

（ひ）（と）（く）（ち）（俳）（話）（7）

お十夜

勝崎 裕彦

秋天高く青く澄み、白雲清く流れる。さわやかな秋の秀気に誘われて、お十夜の季節の到来である。陰暦十月五日の夜から十五日の朝まで、十日十夜にわたって営まれた十夜法要は、浄土宗の寺院にとっては大切な年中行事である。『無量寿経』に、「此において善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善を為すこと千歳するに勝れたり」と説く経文によって、善を修め、善を勧める念仏会である。今日では、日程などの都合から、五日、三日、一日と短縮されて行なわれ

ているが、好季十月、十一月の一定の期日を定めて、称名念仏を共々に高く唱和し、修善修行の時とするのである。

月影や外は十夜の人通り（子規）

双盤の十夜鉦じゅうやがねが鳴り響く十夜堂は、善男善女の十夜念仏でいっぱいである。先程ふるまわれた十夜粥をまだかみしめている十夜婆がいる。取り入れたばかりの新穀や実りの秋の品々が並ぶ供物棚には、十夜柿が赤くおいしそうである。十夜僧の拝誦する諷誦文の抑揚にも福德安楽への願いと止悪修善の行ないがこめられている。十夜寺に月がのぼって、慈悲の光が静かに照っている。

十夜月高くあります円満相（裕彦）

心 経 と 私

萩 原 かね子

般若心経を覚えようと思ったのは今から五年ほど前のことである。そして先づ一日、一巻の写経をと心に期してはじめた。最初は、一巻書き上げるのに一時間ほどかかった。経文のことはなにも知らない私である。が、一字一句真剣に写した。次第に慣れて、四十分ほどで仕上がるようになった。そして、一日二巻の写経もした。今思うと、あの頃の私にはそんな時間があった。そして遂に百巻の写経が出来た。よし、また百巻を続けた。とうとう一巻を三十分で書き上げることが出来るようになった。それに暗誦も出来るようになった。うれしかった。

私が心経を覚えようと思ったのには動機がある。結婚して主人の勤めの関係から転々と住まいが変わった。官舎での生活には、神、

仏などに縁なく過ぎてしまった。そのために、二人の息子たちは、手を合わすことを知らないまま、成人した。息子が結婚して孫が生まれた。しかも女の子だ。その時この子の「幸せ」と願う心が、写経の道へ私を導いてくれたのだった。どうぞ優しい、おもいやりのある子に育ちますように、わが子、孫たちの末永き仕合わせを念ずる気持が仏教へと繋がった。「親の姿を見て子は育つ」、全くその通り、おばあちゃんの姿も大切である。

幸いなことにわが家の近くに浄土宗西山深草派の大本山円福寺がある。大きな本堂で、静かな書院には御老僧が一人のお住いである。時折孫を連れてお参りに行く。御老僧を孫は「お髭のおじいちゃま」と慕っている。

孫の愛ちゃんは今五歳になった。私の家に

は仏壇が無いが田舎の両親の写真を祀っている。「掲諦掲諦波羅揭諦波羅僧掲諦菩提婆阿訶般若心経——」、私が唱える傍らで、幼稚園のお祈りで覚えた廻向文を無邪気に手を合わせ、おもむろに、しかも可愛い声で「シンエンエコウネガワクバコノクドクヲモツテ……」とはじめる。

恥ずかしながら宗旨、宗派や教義のことなど私にはわからない。でもご先祖を敬う心を大切にして毎日を送っている。五十八歳の今、健康に誇りとよろこびを持ち、この春より、登録ヘルパーの仲間にも加わって、お一人住まいの御老人を少しでも慰め、話し相手にもなって、現在を感謝し、張切って一日一日を送っている私である。

稿

全生類愛

寄

「法然父君 仇討禁じ タゴールも 曾我兄
弟が墓に 顔を反けぬ」

「歴史とは 和平白紙なり 戦記如き そを
喰荒す 紙魚(しみ)が 類いぞ」

「スポーツならぬ 生命賭博 勝負事に た
だアレヨアレヨなり 地球人 我われ」

「戦争反対と 戦後うそぶき 初めながら
いま日和(ひより)見 天秤(てんびん)に 掛く」

「米・イラク 批判なすまじ 我われは 戦

争忌避策 真剣 極めむ」

「対処手術等 専門家に一任 国民一同 予
防 健康 管理に 精励」

「核戦に 人類滅亡 自業自得 忘るな恩義
全生類の」

「法然上人に 殺生罪を 懺悔せし 老漁夫
夫婦こそ 真正 宗教者」

「戦争に 吟味も何も 不用なり ただ愛攻
勢にて 埋(づ)め 満たさむ」

合(ごう) 田(だ) 微(び) 雪(せつ)

「目前の 利殖に 目くらみ 子子孫孫の
全滅目指す 人類 我われ」

「目には目 しか術(すべ) 無きや 恩も仇
に 報ゆる方法 手段(てだて) 如何」

「雨降りて 地固まるよりも 晴天の 地馴
らしにこそ 陽は降り 注ぐ」

「虫渡りて 恩返し捧ぐ 時鳥 森こそ鑑ぞ
なべてこの世の」

「犠牲者は われ最後ぞと 断末魔 十字架
上より ご遺訓 キリスト」

「小鳥死す ご合掌に習う 衆生どち 氣付
けば 釈尊 永遠 ご涅槃」

「天地永遠と ニーチェ 淵明 山陽どち
いま壊滅せむとす 我々が手にて」

「如何がなる 事由ありとて 手術以外 避
りたきものは 流血の沙汰」

「天つ神 仰ぎます時 己が足 大地靈神
踏付けて あり」

「戦争大嫌い 口の下から 大好きな 西部
劇 ちゃんばら ジキルとハイド」

「歌人勇 今松陰は 誰ぞ という 全地球
びと 拳り 松陰たれ」

「あさましく 恐ろしき文字 争・闘(戦)・
酷 この世の辞書より 葬り 去り度し」

「和平いずれ 怒る心と 恕する心と 排他
と 寛容 相反する 魂の」

「主義者達よ 素っ裸となれ モットーの妄
執 過熱は 鈍刀を 作る」

「長き物には 巻かれよという しかあれど
天地神こそ 永久長きもの」

「北斎 華山 芸術故に 食 省みず 好戦
連よ 食の欲 捨つべし」

「戦争し 勝敗決むるは 止どめ欲し 士・農・工・商 皆 距て無し」

「他人の土地 かき乱さずして相方の 家内にてなすべし 戦争ゴッコ」

「東西の ドイツに学ばむ 与党・野党 自国・他国の 垣根 除きて」

「同意見 にて向上難し 仇し言こそ血肉ゆめ 憎むべからず」

「いと古き 言葉なれども 新鮮に 想起さるなり 喧嘩両成敗」

「大視野ぞ 同次元『戦争と反対』と 『やむを得ず』との 論争 止めよ」

「釈迦 キリスト アラーの神も み心一つ ひたすら念じます 同じ和平を」

「かにかくに 戦争残酷 子子孫孫へ 残し与え安き 地球 崩壊す」

「戦国の 長も喜び 鉾を収めむ 世を挙げ戦争嫌いと 目覚めし 暁」

「壺内にて 殺し殺さるは 相方のみか 果は壺まで 破壊 なすなり」

「朝夕に 祈り続くなり 犠牲者の 一にんたりとも 現れぬ世を」

「世界中 大佛の心に 埋ずめ度し わが国名は 日の本 と書く」

「切れ物は 役立つ 人命 助くる時」
「つゆ芋や ころも露の あした哉」

「白牡丹 吸込みぬ わが 穢れをも」
「雲・霧・霞 打拂い迎えむ 廿一世紀空」

「梅共ども 雪中に綻ぶ 桜桃」
「いま緑 錦秋紅葉 霜に散る」

「考える 芦 考えざる 芦と 急変し 地球崩壊 暗雲蔓延」

◎『浄土』表紙版画絵販売についての一案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒103 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京)八―八―二一八七

季語やぶにらみ(七)

涼風都門に入る

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

八月八日は立秋。しかし、それは暦の上だけのことで、夏の高校野球の開幕日ということで、季節を感じている人のほうが多いのではないだろうか。

藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見え

ねども風の音にぞおどろかれぬる(古今和歌集巻四、一六九)」の歌に、「秋立つ日によめる」の前書があるばかりに立秋の歌とされているが、立秋の頃はまだ夏の盛りで感覚的に多少のずれがあるのは否めない。おそらく歌会

の席か何かで、立秋の歌を所望されて詠んだものであろう。しかし、この歌が後の文学に与えた影響は大きく、これを本歌として詠まれた歌は枚挙に遑ない程で、俳諧を例に挙げると、「そよりともせいで秋立つことかいの」鬼貫、「秋立つや風幾たびも聞き直し」千代尼、「秋立つや何に驚く陰陽師」蕪村、「硝子の魚おどろくやけさの秋」同、「秋立つや雲は流れて風見ゆる」樗良、等々がそれである。さすがに明治以降の作家には顕著な作例は見当たらないが、意識して避けて通っている節がうかがえるのである。いやしくも文学を志す者で、この歌を知らない人はいいはずであるから。

涼風都門に入る——何によって私がこの字句を覚えたのか記憶は定かではないが、

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども、の歌より、このほうがよっぽど秋の訪れを喜ぶ気持ち」が表れている」

と言うと、晩酌をしていた父は、

「唐詩の中の一節かなあ」

と、首をひねった。

「少なくとも、日本の都でないことは確かだな。とすると、長安か洛陽か……」

「どうして？」

「唐の都長安を模して造られた平安京には、羅城門というのがあったが、礎石が東寺の西の所に残っているだけで、その規模や造られた目的などは推測の域を出ていない。羅城とは、城の一番外側に設けられた城壁を言うのだが、中国やヨーロッパ大陸などに見られるような城郭都市では、この羅城の門を通らな

ければ市街に入つて行けない。そして、夜は治安維持のために閉じられて通行は禁止される。平安京の羅城門が、そんな役目をしていたかどうかは疑問だな。羅城の痕跡が見付かったという話も聞かないし……。もともと羅城を造る意思はなく、形式的に門だけ造つたんじゃないかな。四方を海に囲まれた我が国は、異民族に侵寇される恐れがなかったんだから、強固な外壁を必要としなかったという考えも成り立つ」

「じゃあ、何のために門を？」

「国の、というより、天皇の威信を高めるためじゃなかったかな。外国の使節なんかを、大内裏、つまり皇居を含む諸官庁が置かれてある一郭へ迎えるのに、羅城門で下車させ、北へ伸びる朱雀大路を大内裏の正門である朱

雀門まで、文武百官の居並ぶ中を歩かせたんじゃないかと思われる」

「当時の外国使節といえは、中国か朝鮮の使節でしょ。いわば先進国の使節を歩かせるなんて、そんな失礼なことしたかな？」

「やったさ。朱雀大路が何町であつたか知らんが、『我が国のしきたりでございますれば』って言やあ、向こうだって文句はいえないだろ。庶民はそれを見て、天皇の威光を肌で感じ、ますます尊崇するようになる。ひいてはそれが諸官庁の高級官僚の尊厳を高めることにもつながるから、その程度の策は弄しただらうよ」

と言つて、父はニヤリと笑つた。

やや酔いのまわつた父の言葉には、眉にっばししなければならぬような部分もあつた

が、自称元文学青年の話として聞く分には、結構私には面白かった。昭和二十五年、私が浪人していた年の秋のことである。

「涼風都門に入る、というのが、どんな詩の一節か知らんが、お前が感じるように、秋が来たことを単純に喜んでいただけの詩ではないんじゃないか。独断と偏見で、この都を長安として考えてみるか」

「……」

「唐と接する北方の遊牧民族は、秋が来ると、夏の間草原の草をたらふく食って逞しく育った馬を駆って、平野部の秋の稔りを掠奪するために侵入を開始する。言うなれば年中行事のようなもので、涼風はその予兆でもあった訳だ。また、シルクロードを通じて様々な異文化を伝えた隊商の列も、涼風が吹き始める

とシーズン・オフを迎える。シルクロードはたださえ危険な道だ。それを厳寒の季節に通れる訳はないもの。もっともこのほうは一般庶民の生活にはあまり影響はなかったが。辺境守備に行ったり帰って来ない亭主を思っ

て砧を打つ女房が」

「李白の『子夜呉歌』だね。長安一片の月、万戸衣を擣つ声、秋風吹いて尽きず、総じて是れ玉関の情、いつの日か胡虜を平らげて、良人の遠征を罷めん」

父はおやつというように私の顔を見たが、どこでこの詩を覚えたとも聞かず、手酌でぐい飲み酒を注ぐと一気に飲み干して、そのままごろりと横になった。

「要するにだ、朱雀門を庶民が出入りするの

ぐらした長安と違って、羅城門を潜らなくても、人も涼風も自由に城内に出はいりすることができたんだよ、平安京は」

「朱雀大路って、どの辺にあたったんだろ？」
私が訊くと、

「現在の千本通りとされている。これを境として東を左京、西を右京とよんだらしいが、どういう訳か右京はさびれ、都は東へ東へ発展して行ったんだな。だからいまの京都の地図を念頭に置いて安易に考えると、大変な過ちを犯すことになる」

「右京がさびれた原因は何だろう？」

「そんなことは分からん。千年の間にはいろいろなことがあったさ。東京を見てみろよ、あの一面の焼け野原が、僅か五年でこの変わりようだ。この先どうなっていくのか見当も

つかん。京都は空襲されなかったから、古い物がそっくり残ったが、いつまでも古いままで残れるという保証はないんだ。人間ってやつは古い物に郷愁を覚えるくせに、より新しい物を追いかけたがる習性がある」

「新し物好き。新物食い。お父さんみたいなもんだ」

この時、父はデパートで「軽便握り寿司器」なるものを買って来て、母の饗覽を買った直後であったが、私の揶揄には取り合わず、
「古い町家をビタに建え替えるために掘ったら、平安京の遺構が出てきたなんてことは、今後はちよくちよく見られるようになるんじゃないかな」

「日本では秋風は大体北寄りの風と決まっているが、中国ではどうなのかな？」

「中唐の詩人姚合ようがの『秋日有懷』という詩の結びに、『旧里無因到／西風又一年』、ふるさとへ帰るすべとて無きままに、秋風が吹く、又一年経ってしまった、というのがあり、また、晩唐の詩人李群玉に、題は忘れたが書き出しが、『涼風西海来／直渡洞庭水』というのがある。涼風が西の海（沙漠）から吹きつけて、そのまま洞庭の湖水を渡る、ぐらいの意味か？ 中国では秋風はシルクロードの彼方から吹いて来るのさ」

語尾が不明瞭になったかと思うと、父はもう気持ちよさそうな寝息を立てていた。

昭和二十五年といえ、日本はようやく敗戦の痛手から立ち直りつつあったが、六月には朝鮮戦争が勃発し、いつその火の粉を浴びてもおかしくない状態に置かれていた。日本

の復興を一挙に促進させた朝鮮戦争による特需景気は、この秋まだ表面化しておらず、庶民はつましくつましく暮らしていたが、いまと違って、家庭内には団欒が存在していた。毎晩のように、親子の対話があった。父はいつどこでその知識を得たのか、息子の私が言うのもおかしいが、博覧強気だった。時には定説を覆すような珍説を開陳したりもしたが、いまとなつてはそれが無性に懐かしい。

俳句では「涼風すやかせ」は「涼し」の傍題で、夏の季語である。猛暑に感じる涼味を良しとするのは、高温多湿の日本ならではの感覚であろう。「日本大歳時記」（講談社版）には、「涼風」を別立てにして、鷹羽狩行氏が主要次のような解説をしている。「晩夏、気圧配置が変わって太平洋高気圧が衰弱し始めると、大

陸の高気圧がもたらす北風が特に涼しく感じられ、「朝涼」^{あさすず}「夕涼」^{ゆすず}「晚涼」^{ばんりやう}などの気分に通う。「夕涼み」も涼風を求めている風情であろう。「涼風」^{すずかぜ}は音読も可。

従来、歳時記の旧弊を破って、この歳時記が「涼風」を別立てにしたのは、画期的と言っているだろう。我々が涼しいと感じるのは温度高低によるよりも、むしろ閉めきつた高温の部屋の中でも、扇風機が廻っていれば涼しく感じられるように、風の有無が大きく作用しているからである。若い頃の私は、涼風イコール秋風と短絡していたが、年を取るに従って、考えが変わってきた。晩夏猛暑の候に吹いてこそ、「涼風」である。立秋が過ぎ、残暑が収まってから吹く風はもはや涼風とは呼べず、ただの「秋風」に過ぎないと……。

七月下旬の、連日真夏日と熱帯夜が続いていた頃、私はこの原稿書きに終始した。涼風など望むべくもない毎日だった。集中力が薄れ能率が上がらず、いたずらに書き損じた原稿用紙の嵩だけが増した。そして、身はひたすらに涼風を求めている。——海の風はべとべとしていて駄目だ。とすると山だ。信濃辺りの高原がいいか。残暑の厳しい午下り^{ひるごり}、榆^うか白樺の木蔭に憩えば、高原の乾いた風は涼を運んでくるに違いない。究極の涼風はこれだ。想像は次から次へ想像を生む。

ペンを放り出してひっくり返ると、私はそんなことを思い続けていたのであった。

高原の木蔭想へば風涼し

隆一

(この項おわり)

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ）
（風におまとめ下さい）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年十月二十五日 印刷

平成三年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 有小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三六二）五九四四

〒二二（振替）東京八―八二二八七

◆◆◆好評の新刊◆◆◆

暮らしに
生かす

仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価二二〇〇円

◎仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常用語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

〈出版・発行〉

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三十七 電話(〇三)三三三三—三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六—三三五一まで。

第五十七巻

十一月号

昭和十年五月二十日 (第二種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成三年十月二十五日印刷 平成三年十一月一日発行